

す
み
ね
ぐ
わ



マ
サ
コ

昭和十二年三月十七日父らつす

目次

(この文書でのページは括弧内)

矢島まさ子の年譜	一(四)
まさ子を憶ふ(その一)	五(六)
まさ子を憶ふ(その二)	三九(二四)
まさ子のたまのまへに(短歌)	同
まさ子のこと	同
まさ子のこと	四九(二九)
まさ子のこと	五一(三一)
妹まさ子	七三(四二)
マコちゃん	ヤジマケイジ 七七(四四)
あとがき	七九(四五)

写真三葉

矢島まさ子の年譜

昭和七年（1932）

八月 十四日の早曉東京府豊多摩郡高井戸大宮前三三五番地（此の年の十月東京市杉並区大宮前六丁目となつた）に生まれた。父は矢島祐利、栃木県の生まれである。母はせい子、東京の生まれである三人目に生まれた初めての女兒である。上の兄は文夫、昭和三年年れ。次の兄は敬二、昭和五年の生まれである。

昭和八年（1933）二歳

二月 千葉県市川町大字市川九九四番地（昭和十年十月から市川市とな

つた)へ転居した。此処は通称を真間荘といった。

三月 簡単な言葉が言へるやうになつた。

九月 二十三日父に抱かれ或は母に負はれて鎌倉江の島へ行つた。浅橋の近くで寺田先生にお会ひした。

昭和九年(1934) 三歳

四月 歩き初めた。

九月 弟敏彦が生れた。

十一月 父が健康を害したので父母兄弟と共に千葉県安房郡保田町の海岸へ行き、翌年春まで其処で暮した。此の頃童謡「私の人形」を覚えない発音で歌ふやうになつた。父とよく散歩に行き、脚が達者になつた。

昭和十年(1935) 四歳

三月 保田から市川の家へ歸つた。

四月 上の兄が小学校へ入学した。

八月 この頃から片仮名を少し覚え初めた。

十二月 末、風邪から肺炎を起したが間もなく恢復した。

この年の末頃から片仮名を少し書いた。

昭和十一年(1936)

九月 十九日父母兄弟と共に父の郷里栃木県に行き翌日歸つた。

この年の冬頃アイウエオを全部覚えた。

昭和十二年(1937) 六歳

五月 初旬麻疹にかかつた。

六月 十一日発病、翌日東京市本所区東両国一丁目の佐々木病院へ入院した。疫痢である。

十五日午後十時五十分死去した。

十六日桐ヶ谷火葬場に於いて火葬にした。

二十五日市川市八幡道角の日本聖公会市川基督教会で松本正雄牧師の司会で告別式が行はれた。家は基督教徒といふわけではないが、父の希望に依つたものである。

二十六日栃木県安蘇郡界村大字越名に埋葬した。戒名はない。

まさ子を憶ふ（その一）

矢 島 祐 利

この一編は不幸の直後、雑誌「婦人之友」のために書いたもので、同誌第三十一巻第八号（昭和十二年八月）に掲載されたものである。そのとき私は子供の死を友に知らせる心持ちで病中の事を 割合に細かく書き、それに此の子の平常の事などを少しばかり書き加へておいた。今度、追悼録を編むに当り、これに加筆して載せようと思ひ読みかへしてみたが、筆を加へることは到底出来さうにもないので、これを此のままにしておくこととした。

（昭和十三年五月）

昭和十二年六月十五日、長女まさ子を疫痢のために失つたことはどう考へても残念である。それは私の懇意なお医者が慰さめに言つて呉れたやうに天災であるかも知れない。然し、ロンドンあたりではもう疫痢や赤痢などはない、と

いふ話を聞くにつけても、かういふ病のために子供を失ふことがわれわれの大きな不幸であり不名誉であることを感じ、また一面に於てわれわれ親たちの監督不行届きの責は免れることが出来ないのである。なるほど、それは通り魔に刺されたとも言ふべき不意の出来事であつたに違ひないが、然しそれは防止されなければならぬものである。

今度の発病は六月十一日の朝であつた。此の朝、フンフン言つてむづかるので妻が何処か痛いのか聞いてみたところ、「此処が痛い」といひ、其の次に聞いたとき咽喉のあたりへ手をやつて「此処が痛い」といつたさうである。さうして七時半に熱を測つてみたら三七・四あつたさうである。間もなく私はこれを聞いて此の明け方冷えたので咽喉を痛めたものと思つた。

此の子は割に丈夫な子であつたが昭和十年の暮すなはち四つの冬、肺炎を患つたことがあつた。さうして頭の割に首が細いのでそれを少し心配してゐたのである。それだから直ぐ咽喉や気管支のことを思ひ、私は酒の湿布をしてやりそれから吸入をかけてやつた。

これが八時半頃であつたらう。その間は勿論そつと寝かせておいて、私たちは食事をした。それから行つてみると、間もなく「おなかが痛い」と言つて便通があつた。それは採つてみなかつたけれども、ひどい下痢ではなく、軟い便の程度であつた。

運が悪いといふか、こちらが迂闊であつたといふのか、此の時私は直ぐ或る想像をしてしまった。それはその前々日に親戚の家から豆煎りを一缶いただいたのである。雛様るとき食べる豆煎りであるが、親戚の者の懇意な家に菓子種屋があつて、出来たてでおいしいからと言つて貰つたのを私のところへ持つて来て呉れたのである。此の中の大豆の煎つたのは時々下痢を起すことがある。

ほんの少しではあるが前日にこれを子供にやつたので、私はそのためにお腹が少しゆるんだのだと思つた。此の子ほ胃腸は丈夫だつたので腹のことは余り心配せず、専ら咽喉ばかり案じてゐたのである。さうして大豆のためなら大した事はあるまいと思つてゐた。

をれからもう一度便通があつた。私はいつものやうに出かけるのを少し見合せ様子をみた。さうしてもう一度熱をとつてみた。すると四一・〇に昇つてしまつてゐたのである。これは一分計を五分間入れて測つたものである。これが彼是十時であつた。吃驚して、何の熱であるにしろ頭を犯されるのを恐れて直ぐに氷で冷し、妻が近くの内科小児科のお医者を迎へに走つた。

そのお医者は直ぐに来て呉れた。そうして診察の結果、気管支の方は大して心配にならないが腹の方だといひ、ヒマシ油と飲み薬を呉れた。ヒマシ油を飲んだのは十一時少し前であつた。それから浣腸を行ひ、これは其の後も何回も

行つた。最初の浣腸では宿便が少し出てあとから軟便が出た。病氣は急性消化不良といふことであつた。さういふ手当をしてゐる間に、かかりつけの東京のお医者へ電話をかけて指導を仰がうとした。ところが郷里から客があつて外出したから夜遅くまで帰らないといふことであつた。これはいけないといふ気がしたが、来ていただいた近くのお医者は消化不良が得意だといはれる人でもあり、専らその方に信頼した。二時頃になつても熱は〇・五位しか下らなかつたが、お医者之余り心配なやうな事は言はず、段々納まつて行くやうな口振りだつたので、私は三時少し前から七時まで外出した。

ヒマシ油は三時頃利いて便通があり、此の時粘液便が出たさうである。それから暫くしての便通に僅か血液を認めたさうである。この頃後頭部が痛いといひ、極く軽い痙攣があつたさうである。それでお医者を迎へ、此の事を話し、便も見せたが、その位仕方がないだらうと言つたさうである。子供に何処が痛

いかと聞くと矢張り咽喉が痛いと言ひ、咽喉がぜいぜいしてゐたさうであるから、咽喉を痛めてゐたことは事実である。その後別段変りなかつた。六時半頃お医者が見えて、あれから眠りましたかと聞いたさうであるが、子供は殆んど眠らないことを告げた。それから葡萄糖の注射を行ひ、此の中へ何であつたか他の薬品も入れた。此の注射を行つてゐるとき私は外出先から歸つた。

此のときお医者は急性消化不良で中毒症状であり、疫痢とは様子がちがふといふ話であつた。此のお医者の説では、洗腸といふと腸を洗ふといふのですつまりきれいになるやうだが、洗腸よりもいくらか深く達するわけではなし、腸の壁に粘液がついてゐると其の上つ側を少し取るだけで、洗腸はさう何度も出来ないが、洗腸は何度やつてもかまはないから二時間おき位に行つて、腹の中のわるいものをどんどん取つてしまふのがよいといふ事であつた。尤も此の話は昼来たとき聞いたのであつたかも知れない。夜注射がすんでから種々話して

呉れた中に、かういふ病氣は洗腸で汚い物を取るほかに、葡萄糖なり何なり注射して血液の中の毒素を薄めるより方法がないとか、血管を切り出してリンゲル液を注入する方法もあるが其の効果は疑はしいといふやうな事あつた。私は医学上の知識はもたないのだから、唯聞くだけで、聞いてゐれば尤もなやうな気がするのであつた。

此の注射の時分、すなはち七時頃には頭を少し振り初めて居り、口をぴちやぴちや動かしてゐた。これは何となく気がかりであつたが医者はどうもかういふ風になり勝ちだといふやうな意見であつた。これでうまく眠るといいと言ひ、電燈を暗くしたりいろいろ骨を折つた。それで少しは眠つたが、せいぜい十五分位しか睡眠は続かなかつた。眼をさまして苦しむやうなら矢張り洗腸を行ふがよいといふので、二三時間おきにそれを行つた。夕方から熱は次第に下つて行つた。然し、頭を振り初めた頃からいくらか意識に怪しい点が認められた。

夜に入つて熱は段々下り、さうひどく苦しむこともなかつた。夜の十時頃お医者が見えて、此の様子を見て稍々安心の面持で歸られた。頭を冷し、腹を暖めることを続けるうち夜中の二時に三六・〇になつたので氷枕を取り除けた。

此のやうにして発病第二日に入つたのである。然し、その前に此処へ書き留めなければならぬことがある。それは四つになる弟が、姉よりは少し遅れたが矢張り怪しくなつたことと、隣家の五つになるお嬢さんが矢張りまさ子と同じ時に急に発熱したことである。弟の方は其の日の朝食事をしたが何時もより量が少くてもういいと言ひ、何だか少し怪しいので熱を測つてみると三八・〇あつた。この方は姉の手に次いで矢張りヒマシ油を飲ませて寝かせ、お医者にも見て貰つた。あとで姉と同じ病氣と分つたのだが、此の方は幸ひ大事に到らなかつた。隣家のお嬢さんは矢張り十一日の朝頭と咽喉が痛いと言ひ、私共とは別のお医者に診て貰つたところ、最初麻疹かも知れないといひ、午後まだ

いぶ経つてからヒマシ油をやつたり等したさうであるが重態になり、たうとう翌る日の明け方亡くなられた。

私は隣のお子さんが家の子と同時に同じ様に発病したことを聞いたとき直ぐに共通の原因に基くものと考へ、何か食物を分けたやうなことはないかと尋ねてみた。何も食物を分けたやうなことはないといふ話であつた。然し、なほ聞き訊してみると前日の夕方うちの発病した二人と隣家のお子さんその他のものも二三あつたが、家の外の往来の土をとつて泥いぢりをしたことが分つた。それ以外には共通の原因は考へ及ばなかつた。それゆゑ、此の泥の中に不潔なものがあつて、それが体内に入り発病したのではないかと思ふ。あとで此の想像を医者に話したところ、多分さうだらうといふことであつた。

二日目の朝、まさ子は熱が三六・八になり、昨夜少し怪しいと思はれた意識はずつかりはつきりした。八時にお医者に来て貰つたところ、だいぶ好いとい

ふ事であつた。なほ浣腸した方がよいといふので昨日よりは時間の間隔を長くして矢張り之を行つた。一方腹を温めることも行つた。十二時に三七・四となつた、午後たいしたこともなかつたが、三時にまた三九・七となつた。それから「痛い、痛い」と言つた。五時にお医者が見えて再び葡萄糖の注射を行つた。此の中へ矢張り二三の薬を入れた。これが済んでから夜に入つて矢張り苦痛を訴へ、容態が思はしくないので、昨日指導を受けようと思つたが不在だつた懇意なお医者に病室の開いてゐる手近な病院を聞いて貰つて入院した。弟の方も軽症ではあつても同じやうな病氣らしいので一緒に入院した。これが二日目の夜、すなわち十二日の九時半頃である。

此のときは妻が付き添つて行つたが、話を聞くのに、病院へ行くと直ぐ洗腸を行つたそうである。然し、神経の鋭い児なものだから薬液を腹の中へ入れられるのが気持ちが悪いとみえて、其の半分くらゐしか入らなかつたさうである。

此のために洗腸の効果が余り上らなかつたものと思はれる。これは浣腸の場合でも同じである。グリセリンを腸に注ぐとすぐに便意を訴へてなかなか我慢が出来ず、そのために薬液だけ排出して浣腸の目的を果すことが出来ない。これに較べると弟の方は紳鯉が太くて、グリセリンを入れても平気である。五分経つても便意を訴へない。八分も経つて黙つていたので、こちらでしびれを切らして排便させると沢山排出するといふ具合である。病院へ行つてからも弟の方は洗腸の薬液が見る見るうちに完全に腸へ吸ひ込まれてしまつたさうである。これが大いに利いたやうである。神経過敏型のまさ子の方は、それに較べると遅鈍型の弟よりもいくら損をしてゐるか分らないのである。此の事を私は不憫に思はないわけには行かない。然も、母よりもより多く父に似て過敏型であるまさ子を気の毒に思ふのである。かういふ子供は治療がし難いさうである。

十分な効果は上らなかつたにしてもこの洗腸を行ひ、リングル、其他二三の

注射をして後いくらか納まつたさうであるが、十一時半に悪寒、痙攣があり、夜中から相当に苦しみ、夜が明けたときには、看護のものはほつとしたといふからかなり苦しんだのであらう。十二日の夜入院したときの体温四〇・〇、脈拍一四五、呼吸四二、決して好い状態ではなかつた。

十三日の朝九時半に私は病院へ見舞つた。此の時はだいぶ具合がよかつた。まづ順調の経過と聞いていくらか安心した。此の日の朝の体温三七・四、脈拍一四〇、呼吸三八であつた。私は十一時まで子供の処に居り、少し話をした。人形が欲しいといふので途中で人形と買い一旦家へ歸つた。家に残した二人の兄たちに異常があつてはならないからそれに法意した。十一時の体温は三七・〇、脈拍一四〇、呼吸四四であつた。

五時に人形を持つて再び病院へ行くと、三時頃、ひきつけて譫言を言ひ、わるかつたさうである。人形を渡すと喜んで抱いたが、意識は少し濁つてゐた。

私は六時まで其処に居り、それから家に残してある二人の子供に用心のために飲ませる薬を携へて家に歸つた、五時の体温三八・五、脈拍一三九、呼吸三〇であつた。

夜の九時半にまた病院へ行つた。具合がよくない。然し、大丈夫だらうといふことであつた。十一時に注射するのを見て家に歸つて寝た。家の子供は別に異常はなかつた。

十三日の夜も具合がよくなかつた。病院へ来てから余り眠らない。五分か十分くらゐしか睡眠が続かないのである。さうして此の晩も明け方まで苦しんださうである。

十四日の朝九時に病院へ行つた。其のときは割に安らかであつた。此の分なら好きさうだといふと、妻があなたは丁度好い時ばかり見るようになってゐるのだと言つた。此の日の朝の体温三七・〇、脈拍一四八、呼吸三三であつた。

十一時まで病院に居たが、此の間は余り苦しまなかつた。十一時の体温三七・〇、脈拍一三四、呼吸三八であつた。

私が病院を出て間もなく具合がわるくなつたさうである。葛湯を飲ませたのを戻したさうである。これが吐気の最初である。また譫言を言ひ、一緒に遊んだ隣家のお子さんの名を呼んだりした。本人は勿論知らないがそれはもう亡くなつてゐるお子さんの名である。

病院へ入つて間もなくから、病室の壁に紙を貼つた跡があつて汚いから、其処へ絵を貼つてしまへと言つたさうである。人形の絵と花の絵を貼つて呉れと言つたさうである。然し急にうまい総が見つからなかつたので、私はタイムスの色刷のところを三四枚破つて、四時少し過ぎにそれを持つて病院へ行つた。まさ子がたいへん私を待つてゐたさうである。病室へ入ると「お帰んなさい」と言つた。持つて行つたヨツトの絵や薬の広告になつてゐる綱引の絵などを壁

に貼つてやり、それを見ながら「オーエス、オーエス、まさ子ちゃんも頑張つて病気を負かしちゃへ」などと言ふと「頑張るのね、頑張るのね」と言つて健げにも病気と戦つた。私は子供のべつドの上に横になつて「眠ろう」と言つて眠らせようとした。すると一二分くらゐは眠るのであつたが、長くは続かなかつた。卵黄をやつたのを少し戻した。五時の体温三七・〇、脈拍一四四、呼吸三八であつた。私は六時に一旦家へ歸つた。

私は九時頃病院へ行き、それからあとはずっとみとつてゐた。その頃はもう具合が好くなかつた。脳症状を呈してしまつて絶えず叫び続けた。「チンチン動きます」といふのは三輪車に乗つて弟や兄たちと遊ぶときの言葉であらう。

「鼠、鼠」と叫んだのは、家に鼠が出て困るので鼠捕りで捕つたのを始末するところを先日見たからであらう。それを残酷だとも思つたのであろうか。そのほかいろいろの譫言は到底書ききれない。その様な状態でも私や妻が呼ぶと

殆んどいつものやうに「ハイ」と返事をした。どうも思はしくないのでまた洗腸を行ひ、リンゲル其の他の注射を行った。今度の洗腸も矢張りうまく行かなかつた。これよりさき、私が行つて間もない時分に吐気があつて珈琲残渣を吐いた。其の後も数回吐いた。また痰が咽喉につかへてきれないで苦しさうであつた。

其の夜の十一時頃お医者が心臓がだいぶ弱つて来たことを告げた。然し脈は弱くも打つてゐる。私たちはあらゆる介抱を続けた。其の頃「さようなら、さようなら、さようなら」と三遍つづけて非常に明瞭に言つて看護の人たちを悲しませた。妻が思はず涙を落すのを見て「お母さんが泣いてゐる」と言つた。「おねえちゃんも泣いてゐる」と言つた。頭が侵されてゐても、さういふところは全くはつきりしてゐた。

牛乳を欲しがつたので、妻がもうやりませうか、と言つたが私はまだ望みを絶たずそれを止めさせた。

だんだん朝が明るくなつて来ると十五日の朝である。発病五日目である。さうして一昨日あたりお医者と言ふのに十四日十五日を越せばもう大丈夫だらうとの事であつた。昨日の午後壁へ貼つたタイムスの絵は余り適当でないので、昨夜来るとき兄たちの描いた図画と千代紙を持つてきたのであつた。それをまだ貼る暇もなかつた。この絵ももう見えないのかと思つて悲しくなつたが、それでも私は明方の薄明りの中で其の中の一枚をまさ子に見せた。すると「家にあるね」と言つた。其の意味は家にあるお人形を兄が写生したもので、此の人形は家にあるといふ事なのである。私は眼も意識もそんなにはつきりしてゐるのに寧ろ驚いた。更に自動車の絵を見せると「自動車」と言つた。私は耐らなくなつてお医者を呼んで貰つた。こんなに頭がはつきりしてゐるのだから何とか助からないものと訊ねてみた。昨夜はもう余り長くないでせう、と言はれ

ただけれども、私の言葉をきいて院長さんは出来るだけの事をしてみませう、
と言つて直ちに手当をして下さつた。これは後で見たのだが此の朝の体温三七・
八、脈拍一八〇、呼吸四六であつた。

明け方にしばらく少しよかつたが、間もなくまた叫びだした。其の声はかな
り鋭かつた。然し私たちは絶望せずに介抱した。親戚のものが前から約束の袂
の着物を持つて来た。それを枕もとへ掛けてやつた。私たちは「しつかり、し
つかり」と励ました。子供はよく病氣と戦つた。其のやうにして十五日の昼に
なり、午後になつた。妻は連日の看病に疲労が烈しいので、万一の場合を承知
の上で四時頃家に歸つた。入院後初めて病人を離れたのである。それから後も
病氣との戦ひは続けられた。此処で看護婦〇さんの義務を遙かに越えた努力に
対して感謝を述べなければならぬ。私でさへ疲れのために挫けようとするの
を、〇さんは医者に見離された病人でさへ手当一つで助かるのだからと言つて

一生懸命働いて呉れたのである。

けれども午後六時頃から言葉が少しもつれて来た。さうして体温が下つて来
たのでわれわれは温めてやつた。私が呼ぶと低いがはつきりと返事をする。看
護婦の〇さんが呼んでも「ハイ」と言つた。私は余り多く話しかけたり名を呼
んだりすることをせずに静かに手を握つてゐた。九時頃から呼吸困難になつて
来た。私は子供の傍に横になり乍ら少し眠つてしまつた。疲れて眠りが出たと
いふよりもさうしたかつたのかも知れない。此の子は一番多く私の傍へ寝たが
つた子である。

私は「ブルス」が悪いといふ看護婦の声に目をさました。さうして看護婦の
スさんが三〇グラムの輸血をして呉れた。十時四十分頃である。次いで〇さん
が輸血をするため準備をしてゐるうちに臨終となつた。私は魂の最後の平安を
乱すことを恐れて、名を呼ぶことを控へた。さうして静かに唇を沾ほし。手を

握つてやつた。夕方からはもう叫ぶこともせず、静かな最後であつた。昭和十二年六月十五日午後十時五十分に息を引いたのである。妻は承知の上で先刻家へ歸つた。疲れを休める暇はないであらうが、最後を見るのが辛かつたのであらう。私は近親のものも臨終の場へ呼ぶことをしなかつた。言葉がもつれてからは私は余りものを言ふことをしなかつたが、八時頃であつたらうか、「まさ子、一生懸命頑張りなさい」といふ意味のことを言つた。すると、もう息を吐くときでなければ言葉が出ない苦しさの中から「お父さん、一生懸命はたらいてね」といふ不思議な言葉を吐いた。私は涙を抑へて頷いて見せた。然しそれはもう彼女に見えたかどうか分らない。これが多分彼女の意味のとれる最後の言葉であつた。此の言葉は私の言つた「一生懸命」に誘はれたのは確かだが、どういふ処から出てきたのか不思議である。私は此のまま静かに冷えて行く手の亡骸を抱いてみたいと思つた。然し、妻とその他二三の処へ電話をかけるために掌を出た。

まさ子は数へ年六つ、昭和七年八月十四日の生れである。あと二箇月で満五年になる筈であり、誕生日に何か買つて貰ふのを楽しんでゐたのであつた。生れるときも楽な出産であり、赤ん坊の時分にもこれといふ病氣もしなかつた。割に丈夫な子だと思つてゐたが、前にも書いたやうに頸の細いのが多少気懸りであつた。昭和九年の秋、三つするとき、風をひいて百日咳ではないが咳がなかなかとれなかつた。丁度其の時私の体が疲れて房州の海岸へ暫く家中で行つてゐる間に、まさ子もすつかり丈夫になつて、見たところはちぎれるやうな元気で歸つて来たのであつた。その頃から見た目にも非常に健康さうで、他処の人にもずゑぶん丈夫さうだと言はれるくらゐであつた。事実、病氣といふことをしなかつたのである、ところが、昭和十年の暮も押詰つて、丁度寺田先生の御

病気が重くなつた時分に風邪から肺炎になつた。毛細管に痰が詰つてしまつてかなり重くなつたが、これはうまく助かつた。此の事があつてから、咽喉や気管支の侵されることを恐れて、風を引かせないやうに殊に注意した。さうして昨年中は何の故障も起らず、去年の冬は殆んど風も引かなかつた。今年の二月に少し風を引いたが、たいした事はなくて済んだ。

三人の男の子たちの間の一人の女の子のせみもあつたかも知れないが、健康さうだとは言へ、矢張り一番な華奢な感じのする子はあつた。胸囲ももう少し欲しいと思ふところであつた。けれどもお医者も決して悪い体ではないと言ひ、肺炎のとき診て貰つた一人のお医者にはいい骨格だと言はれたのであつた。胃腸は丈夫で、お腹をこはしたといふことは余りなかつた。便通はんど正確に毎日一回あつたやうである。それだから、今度の発病の初めにも腹のことを私たちが余り心配せず、咽喉や気管支のことを氣遣つたのであつた。また、疫痢

や赤痢などは食べ物を注意し無闇な場所へ連れて行つたりしなければ、さう矢鱈にかゝるものではないと考へてみた私たちの考へにも欠陥があつたのであらう。齒は小さい時から磨かせてゐたので齒が痛いといふことは知らなかつた。そんな風に肺炎をした他はたいした病氣はしなかつたが、かういふ病氣はあとまで其の影響が長く残るのであらう。もう一つ悪いことは今年の四月に子供たちが全部発疹にかゝつた。今年二男が小学校へ入つたので危いなと思つてゐたら果して麻疹にかゝり、次いで全部の子が之にかかつた。此の時、女兒は血精注射でま行つて軽く済ませた方がよからうと考へたのであるが、妻が云ふのに今健康状態が非常によいから其の必要もあるまいといふので、自然のままに任せてしまつた。さうして普通の麻疹らしい経過を辿つて恢復した。恢復してから後、まさ子は胸のあたりに肉がついて来たなどと妻は言ひ、見たところすつかり元気さうになつたが、麻疹のための疲労はまだ本当には恢復してゐなか

つたのかも知れない。

今度の発病の初期の手当は自分としては直ぐにした積りであるが、前にも記したやうに咽喉や気管支を特に気遣ひ、胃腸は丈夫だと思つてゐたため迂闊な難があつたのではないかと思ふ。二度日の検温をもう少し早くしたならば、とも今考へるのである。然しヒマシ油を飲ませてからの手当は、仮りに疫痢といふことがもう少し早く決定的に承知されたにしても實際行つたところと大同小異であつたかも知れない。発病後一昼夜以内に約四割、次の一昼夜に更に四割の死亡率があるといふ病気を五日保ち應へたのであるから、手当がたとへ十分ではなかつたにしても、そんなに不完全であつたとも思はれないのである。これは弁解ではなく事実さう感ずるのである。ただ残念なことは入院してすで行つた洗腸がうまく出来なかつたことである。これは浣腸についても同様である。

これが弟の場合のやうに十分に薬品を注入して長い間持ち応へられたならば屹度好結果が得られたのではないかと思ふのである。まさ子は神経が鋭かつたために禍されたところが多いと思ふ。これはあの子のために気の毒である。それに加へて六歳くらゐになると口が発達してゐるから苦痛を訴へることが十分に出来、それかと言つて事理を弁へて忍耐する力はそれほど備つてないから、取扱ひ難い時期なのではないかと思ふ。

発病初期の経過を今ゆつくり考へて疫痢の前駆症といふものと対照してみると、それと思はれる節がなくなはないのだが、其の時は其の様なことを少しも考へなかつた。疫痢の初めはゴロゴロして欠伸をしたり等すると言はれるが、家の子供はそのやうなことをしなかつた。睡眠中にそのやうな経過があつたとしてもそれに気が着かないほどではあるまい。前日の午後五時から六時頃間に微菌が体内へ入つたものとする翌日の朝までに子供が眠つてゐる間に十分に繁殖して暴威を揮ひ始めたのであらうか。さうだとすると、同時に微菌に侵さ

れたと想像される弟の方が二三時間も遅れて発熱したのは何のためだろうか。体質の相違、従つて病菌に対する抵抗力の違ひといふやうなものだらうか。(あとで聞いたのだが、疫痢の菌は十二時間ぐらゐ潜伏するといふから、夕方の六時頃菌が入つたとすると丁度そのくらゐの時間が経つて朝の六時か七時頃か発病した勘定になる。)

運の悪いときには悪いもので、発病する前日の晩は風呂が食後になつた。まさ子はもう此の頃では昼寝を嫌がつてしないので、夕食後は眠くなることがある。此の晩はだいぶ眠さうであつた。風呂へは私が入れる筈のところ、眠さうだから急いで兄たちが入つてゐるところへ一緒に入れて貰つた。すると二男が「まこちゃんは一ぺんしか入らないで上つてしまつた」と言つた。眠いので早く上つてしまつたのであらう。よく温まらなくてはいけないとは言つたが、別に入れ直しはしなかつた。寝冷えはしない程度に着物は着せてあるけれども、

此の風呂の事を今となつて遺憾に思ふ。十一時に小用をさせた時には異常はなかつたやうである。

以上が今度の病気の経過とふだんの健康状態のあらましである。

次に亡くなつた子供について憶ふことは甚だ多いが、此処には其の性質の大概を記して短命であつた子供に何か特質でもあるならば挙げてみたいと思ふ。

亡くなつたまさ子は口は早く利いたが足は遅かつた。八月に生れて翌年の三月には「パパ」「ハイチャ」「ガッコー」といふやうな単語をどうにか発言した。満一年のとき江戸川の花火を見におんぶして行つたら、余り近くで音がするので「コハイ」と云ひ、其の後「ハナビガコハカツタノ」といふ言葉をひとりで話した。まさ子の二人の兄たちは一年二箇月位で歩き初めたが、此の子は数年三つの春、すなはち一年八箇月で歩き初めたのである。その代り歩き初めた

ら転ばずに歩き、直きに上達した、近頃では足は非常に丈夫で兄たちを連れて散歩に出るやうな場合には必ずまさ子もお伴をした。

三つの秋から四つの春にかけて約四ヶ月ばかり房州の海岸で暮したが、此の時分はまだ舌がよく回らないのに「私の人形」を歌つてそれが実に面白く可笑しく、みんなからアンコールが出るのであつた、此の時分はもうよく歩き、始終海岸を散歩した。

四つの春、市川の家へ帰り、長兄が小学校へ入学した。それから二男や、近所の子供たちと元気に遊んだ。四つの誕生日には上の二人の子供の場合と同じやうにアイウエオの書いてある積木を買つて与へた。別段それを使つて直ぐ教へるわけではないが、其の頃から絵だけでなく、文字に対する興味がぼつぼつ出て来ると思はれるからである。上に二人の兄があるからわれわれが教へないでも何時の間にか少しづつ覚え初めた。さうして五つの夏、すなはち満四年

のときにはアイウエオをあらまし覚えたやうであつた。然し、どの子でも初めは「ア」といふ字、「イ」といふ字とは決して覚えられないものである。例へば「アシのア」、「イトのイ」といふやうに関連させなければよく分らないものである。そこで昨年の八月から帳面にさういふ単語の図解をしてやつた。例へば第一頁へ朝顔の絵を描いて其処へ「アサガオ」と書いてやるのである、次に椅子の絵を描いて「イス」といふ字を書いてやつた。これを晩に一つづつ妻が書いてやつたり私が書いてやつたり時には長男書いてやつたりしたが、結局私が大部分書いてやつた。これを非常に喜んで、やがて私が忘れてゐると夕食後ひとりで其の帳面と鉛筆を捜して来て私に書かせた。これは去年の初冬ごろまでかかつて五十音及び濁音を終り、それから十までの勘定などを絵で書いてやつた。をれから短文を書いてやらうとして一回それをしたきりで何時の間にかこれは終りになつてしまつた。これをやつてからアイウエオは完全に覚えて

しまひ、子供之友の片仮名のところを読んだりした。字が読めるやうになつてから世界が広くなつたと見えて何となく愉快さうであつた。一般に顔付も其の頃から少しインテリジェントになるやうである。

今年六つになつてからは一年生の本をひつぱり出して読み、兄たちのゐるのが自然と刺激になるのか、私たちは別段教へないのに最近是一年生の本にある漢学位は読むやうになつてしまつた。われわれは特に文字を覚え本を読むことを期待するわけではないが、自然のままにさうなつたのである。殊に私の家では夏など私が寝ころんで本を読んでゐれば四人の子供がそれぞれひつくり返つて身分相応の本を宙に支へて見てゐるといふ情景は私としても制止し得ない勢ひであつた。近頃ではまさ子は平仮名も年分以上知つてゐるといふのは二男の報告するところであつた。

まさ子は想像力がずぶん発達してゐたと思ふ。われわれ大人の話聞き囁つてゐて、それではああするのだ、かうするのだといふ事をかなり判断してゐたやうに思ふ。年の割に頭がはたらき過ぎるので、少し氣遣ひに思つたこともあつた。今年の春までゐた女中が「まさ子さんはこれで長生きするでせうか」と言つたことがあるさうである。真面目で無口な女中が之を言ふには深くさう感じたのであらう。女中が言ひ付けられた事を忘れてみるとまさ子が注意することが度々あつたのである。

性質は極めて従順で嘗て不平を言つたり物をねだつたりしたことはなかつた。今度の誕生日に何を買はう、といふ事を聞かれて始めてあれこれといふ意思表示をするのであつた。さうして私たちの買つて与へるものを非常に喜び、大切にして、それが何かの拍子に壊れたりすると繕つて呉れといふのであつた。また私の机の上に本のカタログだのいろいろ不用のものがあると、それをよく心得てゐて、「これ、いらないの」「と聞くので」「いらないからあげよう」といふ

と、それを大事さうに集めて遊んでみた。亡くなつてから持ち物をしらべてみたら、さういふ紙を自分で四角に切つたのが何十枚もきちんと重ねて箱の中に入れたのが幾組も出て来た。中には覚束ない手付で数字を書いたのもあつた。これはみんなお金で、これで次兄や弟などと遊んだのださうである。

さういふ風におとなしかつた一方に非常に意志の強い利かぬ氣のところがあつた。なかなか氣が強くて、長男は此の春三年生になり二男が一年に上つたのだが、其の頃「にいちやんは優等、敬二さんも優等だらう、私が学校へあがつて優等をもらつて来ると免状が三枚だね」などと大真面目で言つてみんなを笑はせたものである。うつかり兄たちがだらしなく物を散らかしたりしてゐると嬌めるほど勝気な子であつた。此の話は度々引合に出て恐縮な位だが、今年の一月の婦人之友へ笑顔の写真を載せたいといふので私の子供も写す筈で日を決めて居つたところ、其の日差支が出来たので翌日行くといふ電報が来た。其の

翌日は学校へ行つて私は居なかつたが、社の人が写しに来ると昨日来なかつたから今日は笑つてあげないと言つてたうとう笑はなかつたさうである。「お父さんの居るとき来れば笑ふ」とも言つたさうである。社の人にはあ氣の毒をした。

此の子の事はまだまだ書ききれないが、要するに一風變つたところがあつた。小さい頭をそんなに働かせないでもう少しぼんやりし居たらよいと思ふことさへあつたけれども、頭腦の中の回転ははたから制止することは出来ないものやうであつた。けれどもそのため体が保たないほどであるとは考へてゐなかつた。殊に今度の病氣が疫痢といふやうなものであつてみれば、暴疫のためにむぎむぎ生命を奪はれたことを悲しまないわけには行かない。

然し、今は、あの小さいながらによく回転した頭腦もそのはたらきを永久に

休止してしまつたのであるから、われわれは其の魂の平安を祈るほかはないのである。

(昭和十二年七月五日)



昭和十一年十一月四日うつす

まさ子を憶ふ(その二)

矢 島 祐 利

私は去年の七月に右の一篇を書いてから、もつと精しい記録を作つて置きた
いと思つた、然し、書くことはいくらもあるさうでも、そめために筆を執るこ
とはなかなか出来なかつた。それから間もなく私は妻と子供を連れて北軽井沢
へ行き其処に一月余りを送つた。未だ嘗て避暑といふことはしたことがなかつ
たが、常時私は寺田先生の遺稿の整理といふ大事な仕事をしてゐた最中なので
それに支障を来さないやうに少しでも元氣を取戻さうと思つて人のすすめに従
つたのであつた。もう一人居るべき筈の人間が、日が暮れても歸つて家ず、夜
が明けても姿の見えない状態で、生れて始めての避暑をするのは自分にとつて

は実に苦い杯であつた。その間にあつて私たちは子供のことを話し合ひ、思ひ出したいろいろの事を妻がノートに書きとめて行つた。それは妻が整理する筈である。今また私はいろいろの事を憶ふ。そのうちの主なるものを他の部分となるべく重複しない範囲で書いておきたいと思ふ。

まさ子は六つで死んでしまつたのであるから、人が死ぬといふことをどの程度に知つてゐたかは勿論分らないが、少くとも言葉の上では死ぬといふことを知つてゐた。時々「テラダセンセイガシンチャツタノネ」といふやうなことを言つた。私が先生の遺稿の整理をしてゐたので先生の著書が机の上に積んであつたり、先生の肖像があつたり、話もつい先生の事に及んだりすることがあるので、先生のお名前をすつかり覚えてしまつたのである。先生の奥様にお目にかかつたりしたので、寺田先生といふのが非常にリアルに感じられて来たらしい。先生の家には猫が居るといふ話も印象に残つてゐたやうである。さうして先生がお亡くなりになつたといふことも兎も角も分つてゐたのである。

もう一つは私の祖父の死も与つてゐると思ふ。それは五つするときであつた。祖父はもう高齢で、其の頃だいぶ老衰してゐたから何時会へなくなるか分らないので私は昭和十一年の九月に家中で郷里に祖父を見舞つたのであつたが、それから一月余りの後全く枯木の仆れるやうに死んだのである。だから、此のあひだ会つて来たばかりのあのひげの生へたおぢいさんが死んだ、といふことが子供心にも強く感じられたのであらう。

まさ子の追憶には寺田先生のこと不思議に間聯してゐるやうである。先生の御病気の重くなされた昭和十年の暮にまさ子は肺炎になつてかなり悪かつた。漸く峠を越して大丈夫らしいといふので、大晦日の午前に理化学研究所の寺田

研究室へ駆け付けて先生の容態を尋ねたのである。さうしてそれから数時間のうちに先生はお亡くなりになつてしまつたのである。

前にも書いたやうにまさ子は先生のお名前を何時の間にか覚えてしまひ、お写真をみても直ぐ分るやうになつてゐた。まさ子ちゃんは二つのとき江の島で寺田先生に会つたんだよ、といふと「フーム」といふのであつた。昭和十一年から十二年へかけて私は先生の全集のためにかなり忙しかつた。まさ子は時々「お父さんと遊ぼう」と言つたけれども仲々相手になつては居られなかつた。

土曜日の晩だけはトランプなどをして少し遊んでやることにした。するとカレNDERが青くなるのをよく心得てゐて「けふは土曜日だから」などと言つて当然の権利のやうに遊び相手になることを要求するのであつた。親譲りの肖つ張りで何とかかとか言つてなかなか寝ようとしないのだが、ふだんの日には「早く寝なさい」といふと「原稿を書くんだから？」といふやうな先廻りを言ふこ

とがあつたりして、妻と顔を見合せる場合もあつた、兎に角、まさ子のことを憶ふと、おのづと寺田全集を聯想し寺田先生を憶ふのである。

まさ子は悲しいといふやうな事は知らなかつたと思ふ。それは時々兄弟と喧嘩をして泣いたこともあらうし、肺炎になつて辛子の湿布をされたのは辛かつたであらうし、また最後の病氣のときに苦しかつたのに違ひない、然し、それくらゐのこのほかには別にこれと言つて不幸なこともなく、何の不平も持たずに育つてゐたと思ふ。世の中の悲しいこと、汚いものなどを知らずに死んで行つたのは清らかといへば清らかであり、幸福といへば幸福かも知れない、然し私は人生の悲しみをも知るに堪へずして終つたことは矢張り大きな不幸であつたと思ふ。

まさ子が死んでから私はその持ちものを集めてしらべてみた。そのうちで、いたづら書きの帳面や何か書いてある紙きれを丹念に見て行くと、病気になる間際に書いたと思はれるものには意味の分る文をなしてゐるものが少しばかりある。

多分去年の五月頃書いたと息はれるものに「オカアサマワハガキンバデス」といふのがある。これは「オカアサマワ」まではつづけて書いてあるが、あとは丁度色紙のあつちの方へ一句こつちの方へ一句書く流儀のやうに文字が飛び飛びに書いてあつて、ちよつと考へないとつづき具合がわからない。さうして脇の方へ「マサコ」と名が書いてある。口絵の写真のわきに載せた「マサコ」といふ文字も五月か六月に書いたものと思はれるものである。

もう一枚の紙には「オカアサントオニイサンガオサカナオヤイテイル、イマケイジサンガセイカフヒヤウオカイテイル」といふのがある。これは去年の六月になつてからで、はつきりは分らないが、何でも病気になる数日前位だつたと思はれる。同じ紙に「ウチデサワグナウルサイ」「イマネルトコロデス、イマトシヒコガネマキオキテイル、イママサコガネマキヨキマシタ」と書いてある。私はまさ子がこれを書いた時のことを思ひ出すことが出来る。「ウチデサワグナウルサイ」といふのは長男の眞似であるが、あとは自分で考へて書いたのである。

これは綴方といつては大げさだが、兎も角も綴方である。さうして、例へば一枚の洋服をも自分で作ることなしに死んだ幼児の作つた殆んど唯一のものである。

今度此の追悼録を作るのに当つて写真を二三枚入れようと思ひさがしてみたが、子供の写真はあまりとらなかつたので適當なのがなかなかなくて困つた。

写真屋へ連れて行つて写したことはせいぜい二度ぐらゐしかなかった。二つの秋と三つの冬にほかの子供たちと一緒にうつしたのがあるきりであつた。親戚のものなどが写した素人写真が一、二枚ないことはないがうまく写つてはゐない。それで四つときの写眞はないと言つた方が早い。五つの秋には写真屋でうつさうなどと言つてゐたのだが、丁度婦人之友社で子供の写眞をうつしに来て呉れたので写真屋へ連れて行くことはやめてしまつた。此のときまさ子は思ふやうにモデルにならないでうまく撮れなかつたさうである。此の話は前の追憶の中へ書いた通りである。此のときほかの子供たちと一緒に十四五枚うつして貰つたのだが、そのうちの一枚を此の集に入れさせて貰ふことにした。人形を抱いてゐるのがそれである。

私は自分で写眞をうつすことに殆んど興味を感じてゐなかつたが、去年の春高知の寺田先生のお墓まゐりに行くのに写真器を持つて行つてみようかと思ひ立ち、練習にいろいろのものを写してみたり久しぶりで暗室といふものへ入つてみたりした。その時分に子供を材料にしたことも数回あつた。今度必要が起つてその手習のまづいフィルムを捜し出したのである。口絵にしたのと、それからもう一枚ビクニツクのところがそれである。全く写眞の稽古として写して捨て置いたものが今は思ひ出の品とならうとは夢にも知らなかつたことである。人間は例へばどんなに愉しい日の記念の写眞でもそれが自分の棺の上に飾られるかも分らないものだといふ感じがするのである。

三つするとき「私の人形」を歌つて愛嬌があるのでアンコルが出たといふことを前に書いたが、その発音はざつと次のやうなものであつた。

ワタシノニンゴハヨイニンゴ

メハバツチリントジロジロナツテ

チイサイクチモトアイマシウ

ワタシノニンゴハヨイニンゴダ

まだ断片的なことはいくらもありさうであるが、書き留めて置きたいと思ふやうな事は大体尽きたかと思ふ。何と言つても短い一生であつたから、憶ひ出と言つても果敢ないものばかりである。

(昭利十三年五月)

まさ子のたまのまへに

矢 島 祐 利

夢さめて今居し子ろが見えざればその名呼ばふ
とする夜半のあり

朝餉すと何か足らねばおもほえずわが傍らをか
へり見にけり

生ひ立ちて別れて行かむ時さへやかかる思ひの
少しあるべし

短かけれどなれが一と世のすがすがと過ぎにし
みればさちと思はむ

安らかに汝が死に行くを見しよりは死といふこ
とをわが怖れざらむ

たたかひにいのち死にたるつはものもわがをさ
なごも安らかにいませ



昭和十二年三月二十一日江戸川堤で父うつす

まさ子のこと

矢 島 せい 子

一 タヤけこやけの歌

まさ子が市川へ越して来た二歳の春、淺草の祖母からベビオルガンをもらった。レコードを聴かせて眠らせることから思いついて、お昼寝の枕元で童謡を弾くとうとうと眠りはじめる。其の中で、タヤけこやけの曲が静なせぬか、一番よく聞いてゐるので後には繰返し々々そればかり弾いてゐた。始めの中は弾いて歌つてゐたのが、歌はぬ中に眠るほどになり、お昼寝がしたくなるとタヤけこやけにしませうよといふやうになつた。

歌ふことの下手な私は末の敏彦もベビーオルガンを子守歌の代りにした。お母さん、もう、タヤけになさいよ」と、敏彦の眠るのを待つて、何か造つてもらひたかつた時など、まさ子はよくさう云つた。

疫痢に罹つて死ぬ日、どうかして少しでも眠らせようとそばに寝て、小さい時からいつも静かに眠らせたタヤけの歌を歌つた。すると、苦しさうにしてゐたまさ子は、ばつちりと眼を開いて大きな声を張り上げてタヤけこやけの歌を一も二も終りまで合唱した。そして之が母と別れの歌になつてしまつた。

教会で告別式をする時、何かまさ子さんのお好きな歌をオルガンで弾きませうといつて下さつたが。タヤけこやけでは式にふさはしくないと見えて、たうとう止めになつた。

私はもうタヤけこやけは歌へない。

二 床 や さ ん

「敏ちゃん、いらつしやい。頭を綺麗にして上るから。」まさ子は大きな声で、弟の敏彦を呼んだ。

小さい椅子が出してある。敏彦が腰をかけると、胸へ風呂敷をかけてやつた。まさ子の手にはお兄さんの切符きりが握られてゐる。

「敏ちゃん、動くと虎がりになるわよ」せわしさうにバリカンを使ふ眞似をした。

兄二人と弟が父や母に散髪してもらふのを見てゐるので、よく床やさんごつこをして遊んだ。或時はまさ子がお客になつて兄が床やさんになり、まさ子の髪をびしょびしょにぬらして櫛でとかした。

女の子の頭はむづかしいからと父親がいふのでまさ子は髪床へやる事にした。

時々父が行く店へ連れて行かふとすると愚図々々してゐる。「でもあの店は上手なのよ」といつてすかして連れ出した。国道から一寸はいつた其の店で威勢よく迎へてくれた親方の顔を見るとまさ子は椅子へ上らない。どうしてときくと、「お弟子さんがいゝの」といふ。親方も仕方がなしに小僧を出店へ走らせ、て弟子を呼んでくれた。さつぱりとなつて家へ歸つてから「まさ子はどうして親方がいやなの」と聞くと、「だつて前に行つた時、あの人は鏡の下から匍ひだして来たんですもの。」と非難するやうに答へた。

小さな二軒続きの店を借りてゐたその床やさんでは一軒を寢所に一軒をお店にして、其のしきりの壁にそつた大きな鏡の下に縦一尺横三尺ほどの掃き出し窓のやうな処が出来てゐた。隣の家で休んでゐてお客が来た時此処から應對した。親方が黒いマスクをかけて身体をひらくしてぬつと、この穴のやうなところから出て来た時以来、まさ子はきらひになつたさうである、「お弟子さん

は裏からまはつてきたのよ」といつてゐた。

兄の通ふ小学校へ行く道に埋髪店があつた。こちらの店は前が原つばで、夏などよく風が吹き通して涼かつた。然しどうも「まづい」といふ人が多かつた。まさ子はこの店の方が好きで、私が刈つてやれない時には此の店の方へ行くと云つた。けれども、其処でもなるべく弟子の受持の椅子があくのと持つてゐた。「どうしてなの」ときくと、「どんしんてんもん」と「ん」の字を一々入れて、鼻のあたみに皺をよせて笑つてゐた。

六つになつてからはほとんど家で私がきり揃へてゐた。まわりは長くのびすぎた時はバリカンで刈り込んでから安全かみそりですつた。狭い庭に莫座をして椅子を出して暖い陽向で床やさんを始めるのであつた。まさ子は之が一番いいといつて一時間かかつても平気でゐた。「ジヨリジヨリ」と称してゐた顔そりがすんですつかり終ると、家へかけ込んで鏡台の前に坐り、「綺麗になつ

た」とはしゃいだ。伸びると「お父さんのはさみできつてよ」とせがんだ。父親に似て少し赫くやはらかい髪の毛の触感がまだ私の掌の中に残つてゐる。

三 雛 祭 り

眞間荘の家は狭い。お父さんの二つの本棚で床の間は一つぱいだつた。それでも三月が来ればロンドンタイムスや岩波講座を片寄せた空処に箱を台にしてお雛様が飾られた。

四つの春は保田にゐてお雛祭りが出来なかつた。東京から送つてもらつた豆煎りを食べながら私達はまさ子に気の毒に思つたが当人は一向平氣だつた。

翌年、五つの三月は独りで飾る事が出来るやうになつた。雛菓子、豆煎り、白酒、菱餅といろいろならべて喜んだ。

昭和十二年の三月には三日のくるのをまちわびた。其の日は子供たらでお雛様になにか作つて上げませうといふので、おまんぢうをふかすことにした。兄二人とまさ子は私と一しよに餡を包んだ。敬二が下手に包んで腹が切れたとさわぐのを時々ざろりと見ながらすまして器用な手附きでまさ子は沢山作つた。小麦のやら蕎麦のやら、暖いお饅頭が出来上るとお雛様にもそなへて子供四人小さな食卓を囲んだ。

「之は兄ちゃんが作つたのよ」「之は敬二のだね」「そうよ、ほらほらあんこが出てゐるわ」と大さわぎだ。敬二は「僕のはまこちゃんのよりづつと下手だね」とあつさり兜をぬいだ。食べ終ると又一回お雛様の前にならんでながめた。「敏ちゃん、之はワヤヤよ、今日わをしなさい」といふと敏彦がお辞儀をした。ワヤヤといふのは敬二が小さい時お雛様をいぢりたがるので触つてはいけないの、お辞儀をなさいといふと、どうしたわけか「ワヤヤ」と称へておがんだ。この話が時々でるのでまさ子が云ふたのであらう。文夫はクレヨンを出して来

て内裏様を画いた。皆神妙にして兄を取巻いて見てゐた。お隣りの操ちゃんか呼びに来た。一寸遊びに行つて帰つて来ると又まさ子は床の間をながめてゐた。

「お母さん私の家のは少ないわ。」まさ子のお雛様はお人形は内裏様だけだ。

あとは屏風とお膳、高つきぐらゐしかない。紅い雛段に三人官女五人囃子其他沢山並べたのを見てきて少々物足りなかつたのだらう。不断遊ぶお人形をみんなもつて来てならべて見た。まさ子の人形のそばに私の奈良人形のお雛様がある。「ねえ、お母さんの分を私に頂戴ね」みんな上げると答へると大喜びだつた。夕方用事があつて笹塚の広瀬さんへまさ子を連れて行つた。其のお宅でもあつさりと金屏風の前に内裏様が飾られてゐた。まさ子は「家のお雛様みたいでいいのね」と満足げにつぶやいた。

四 お留守番

昭和十一年、十二年と続けて二度の春休みを、まさ子の父は高知への旅に過ぎた。日頃父のふところ子であるまさ子には此のお留守番は中々大事件であつた。

昼の中は遊びに取まぎれてゐたまさ子も夜になつて床の中にはいつて見ると父なしには眠りつく工合が悪いとみえて、右を向いたり左を向いたりして色々位置を変へてみた末に、「ねえ、お母さん、お父さんはいつかへるの、ねえお母さん、手、手、」と、手をつなぐと云ふので、静かに敏彦を眠らせた私はまさ子の床へ行つてお話をしながら相手になつてゐた。こうして毎晩一しよに眠つたが二二日たつと父から絵はがきが届いた。その頃すでに覚えたヤジママサコの宛名を見付けて飛上つて喜んだ、十二年の春に高知から帰る時は電報を打つてよこしたが、お父さんは今夜帰るときくと床へははいつたものゝとうとう眠らずに待つてゐた。

十一年の八月父と兄二人は信州へ小旅行をした。まさ子も行ききたがつたが、父がもう少し大きくなつてからと云ひ聞かせるとうなづいて「では来年つれていつて」と約束した。リュックサクク姿も軽やかに皆が三時起きをして出発した後、いつものやうにゆつくり目を覚ましたまさ子は、自分に取分けてあつたサンドウヰツチやお寿司を食べながら、「もう皆どこまで行つたの」ときくのが思ひなしか淋しさうなので私は仕事の手を止めて共に遊んだ。三日ほどして蓼科の湯の宿から届いた絵はがきはまさ子を慰めた。文章も読める様になつてゐたので繰返し々々読んだ。小諸のみどり色の林檎や胡桃羊羹をお土産にお父さん達が帰つて来た時には留守中に縫ひ初めたまさ子の白いジョーゼットの洋服も出来上つてゐた。

それから間もなく父と母に連れられて白いジョーゼットの洋服をきたまさ子は意気揚々と東京へ行つた。「お兄ちゃんも敬ちゃんもお留守番よ。」今日だけは一人つ子なのである。白い洋服に似合ふ鍔の広い造花のついた帽子、それからハンドバツグと絵本。買物をすませて父母の間にあてて食事をした時、父を仰ぎ、母をながめて得意さうなまさ子の微笑。今もなほ臉に浮ぶ忘れられぬ風景である。信州行のお留守番をかくねぎらはれてまさ子はいかにも楽しさうであつた。

又、これはなくなる前月の末であつたが、俄の雨降りに雨具を持たずに学校へ行つた兄達を案じて私が空を眺めてみると、「お母さん、私、敏ちゃんを遊ばせてお留守ばんをしてゐますから兄ちゃんに傘を持つていつてお上げなさい」とすすめてくれた。それは願つてもない事であるが、まだ聞き分けのない敏彦をすかしながらのお留守ばんはちとむづかしい事とためらつてゐると「大丈夫、泣かせないでゐるから」と云つてくれた。それに力を得て、之も一つの経験になると、まさ子のいふがまゝに兄二人の傘を持つて学校へ出かけた。眞

間川の橋の手前まで行くと葉桜の堤を向ふから弟の敬二が近くの大工さんの子供と一つ傘にはいつて帰つて来た。洋傘を渡して兄に届けさせ私は引返した。真間荘の人口に来た時若しや泣声がせぬかと案じたが家の中は静かだった。玄関を明けると「お帰りなさい」と元気にさげんでまさ子がかけ出して来た。「敏ちゃんは大入りいわ」と私の言質をまたずに笑ひながら云つた。あゝまさ子もこんなに立派にお留守ばんが出来るやうになつたと私は感謝の念に堪えなかつた。手伝ひの居ない家庭で、「私なんでもして上げる、お留守ばんでもお使ひでも」とさゝやいた言葉の通り、全力を尽して実行してくれたのだつた。

五 お 風 呂

まさ子が生れた西荻窪から市川へ引移つたのは生後半年の時であつた。西荻窪の家では風呂場がないので生れてしばらくは盥で湯を浴せ、其の後は銭湯へ

連れて行つた。或る時文夫、敬二、まさ子と三人連れて行き、文夫を洗つてさきにあげ、二人を湯槽に入れて温めてゐると突然乱暴に入つてきた人のあふりを受けて敬二は沈みかけた。驚いた私はまき子を抱きしめたまま片手で敬二を助け出したが幸ひ少量の水が耳に入つただけですんだ。

此の様な事もあつたため、市川では風呂場のあるのを幸ひに桶を買つて風呂をたてた。内湯をめずらしがる男達を次々に浴せてから父がまさ子と呼ぶと喜んで手を出す。温かに浴してすぐ眠る。かうして次第に育つていつた。亡くなるまでを回想してみても私と一しよにはいつた記憶よりむしろ父親とのほうが多いやうな気がする。ただ保田に転地してゐた時は父とはいらなかつた。たまたま父母が都合の悪い時には兄弟四人で狭い処でほちや々々遊んだ事もある。殊に疫痢にかかつた前夜は父母共に差支へがあつて、入れてやれぬまゝに、余程、今夜は風呂は休みに仕様かと思ひ乍らも、泥だらけの子等の手足を見れば

つひ止められず、まさ子は兄二人に洗つてもらひ、次兄の敬二が「母さんまこちゃんはいったばかりでもうでるんだつて」と大声に云ふのを開き流して出て来た子を眠からうからと叱りもせず、再び湯に入れて温まらせなかつたのは、之も病をつのらせる原因の一つではなかつたかと残念に思つてゐる。

私の髪の毛は太く粗いがまさ子のは細く柔い。髪はお風呂場で、私に、或は父に抱れて洗つたが五歳の暮頃から時々独りで洗つた。私が或る時石鹸を沢山つけて泡立て、短い髪をしごいてぴんと上に向つて立て「まさ子鏡を見てごらん。ほらキューピーさんに似てゐるでせう」といふとそれから洗ふことに、「キューピーさんにしてよ々々」とせがまれて困つた。又、私はシャンプーを一箇半使ふのでまさ子に残りの半箇だけ使はせるとほそい指先をしなければ独りで洗ひ、「お母さんまだ石鹸がにほふ、嗅いで頂戴。」と云つて何度もすすいだ。

六歳になつてから一しよにはいると気が向けば私の背を洗つた。手拭ひがやつとつかめるほどの掌で、そろろろ流してくれるので、とてもくすぐつたいけれ共折角一生懸命で洗つてゐるのを笑つては悪いところへてゐると、さあ綺麗になりましたと湯をかけてくれた。

六 麻 疹

子供が大勢になるに連れて伝染病は特に恐しかつた。このやうに狭い家で一人が罹ればきつと次々に伝染するだらうと思つたから。然し長男が学齢に達するまでは軽い水泡をただけだつた。それは市川へ越して来た翌月、お隣りの子供からうつつた。水痘は引搔けばあとになるからと聞いたので兄二人が床にもつかず軽くすんだ後、まさ子が発熱したとき女の子の事故若し醜い痕が残つてはと夜も昼も手袋をはめてかさぶたを無理にはがさぬ様に注意した。それにもかかはらず、乳を飲ませるのに一寸手袋をはずしたひまに口あたりを掻い

てしまった。日が経つにつれて唇の上の水痘の傷ははつきりと痕になった。大人になった時に怨まれるだらうなと父がよく悔んだのも今は思ひ出の一つになつてしまった。

長男が入学した時は麻疹の流行年で近隣でも罹病した子供が多かつたから定めて家でもかゝる事と思つてみたが案外何の事もなくすぎた。それから二年経ち次男が入学した春、即ち昭和十二年の四月に長男と次男とほとんど同時に発病した。長男は案外早く発疹したが敬二の方はなかなか々々隙がかつた。其の頃矢島の母が上京した。着いた日、子供に菓子を買つてやると云つて祖母は町へ買物に出かけた。時雨れてゐた空はぼつと雨を落した。外を見て、祖母は何処まで行かれたらうと案じてゐるとまさ子が、「私、傘を持つて行つて上げる」といふ。でも行く先がわからないからといふと、ぢやあ京成の踏切で見れば分るでせうといふので、それではと頼むと、洋傘をさし、祖母の分を一

本持つておかつばの髪をゆら々させながらさつさと出かけた。間もなく入れちがひに祖母が帰宅したので聞くと知らぬといふ。私はまさ子がきつと何時までも祖母を持つてゐるだらうと思ひ、馳出した。踏切の傍の電灯会社の前に姿が見える。心持ち尻りの下つた大きな目を見張り紅い頬を緊張させてぢつと前方を見つめてゐるのは行きかふ人々の中に祖母の姿を探し求めてゐるのであらう。呼んで訳を話すと、おばあちゃん濡れなかつたかと尋ねた。其の日から四五日経つてたうとうまさ子も麻疹に感染した。当時ずつと元気でどこにも故障がなさそうだったので別に医者にもかけず勿論血清注射もしなかつた。続いて弟の敏彦も罹病した。八畳の部屋に兄弟四人枕を並べて寝た。然し兄達はもうそろ々々終りに近づいて来て元氣になり床の上に本をならべ折紙や切抜きの店をひろげてゐた。

まさ子は兄達と一緒に寝てゐるのをむしろ喜んで、まだボつボつが出ない出

ないといった。毎日大人しくしてゐたが発疹する前日だけは、炊事、洗濯、看病といそがしい私をとらへて、そばに居て頂戴と中々離さなかつた。全身に発疹してからは順調に熱も下つて食事もよく摂り次第に床の上に坐つてお人形や折紙で遊ぶやうになつた。それから間もなく元気に遊び或は通年する四人の姿を見て、案じてゐた麻疹も無事にすんで先づ々々お役がすんだと人にもいはれ、自分でもほつとした時、誰れか一月後に到つたまさ子の死を想像し得るであらうか。

七 土 曜 日

毎日カレンジャーを一枚づゝめくるのは久しい間まさ子の役になつてゐた。一枚々と剥いでいつて、やがて青い紙が出た時、「あ、今日は土曜日」とまさ子は飛跳ねた。兄ちゃん敬ちゃんと叫んで土曜日が来た事を報告する楽しい土曜日。

日々父は仕事にいそがしく私も家事に駆はれてゐる。かうした家庭では始終子供の相手になつてはゐられない。日曜日の夜は明朝の支度もあり、やつぱり土曜の夜が一番くつろぐので、自然其の日を持つやうになつたのであつた。平常なら夜食後は入浴就寝とせきたてられるのが、此の夜はまさ子は当然のやうな顔をして先づ父の膝の上を占領する。そして或時はノートに絵を書いてもらひ、字を教はり、トランプのお仲間入りもした。父が用事で手の離せぬ時は私の本を読んだ。少国民文庫の日本名作撰の中にある浜田廣介氏の「五匹のやもり」はどういふ所が気に入つたのか、まさ子は好んで之を読ませた。あまり何度も続けるので傍聴する兄達から苦情が出たりした。兄達のために土曜毎に続けて読んだ本の中では世界名作撰の中のトルストイ作「人は何で生きるか」をあきずにきいてゐた。

八ま々ごと遊び

女の子の誰れでもがするま々ごと遊びはまさ子も矢張り好きだった。四つの暮、肺炎で寝てゐた時も祖母が大人しく湿布をさせるのを見てゐて今度来る時御褒美に何を持つてこようかと問ふと、おま々事の御茶碗と俎板と本当に切れる包丁がよいと答へた。隣の操さんといふ一つ年下の女の子と遊ぶ時も亦兄達と莫蔭を敷いて庭で遊ぶ時にもぢきま々ごとをした。何時もお母さんになつてゐたが、時たま大嶋さんといふ私の友達の家へ行くと、此処にはお嬢さんが二人ゐて上の知子さんは同い年だがずつと身体が大きいのでまさ子は赤ちゃんになつたさうだ。まさ子は大きくなるにつれておま々事の包丁だけでは満足できなくなつて勝手へ来て野菜を切りたがつた。危いからと止めても、自信をもつて大丈夫だといつた。裏庭の片隅に鶏小屋を作り五六羽のレグホーンが飼

つてあつたので其の餌にする大根の葉や小松菜等をきざんだ。玉子を取つてくるのは好きでも鶏はきたないからと庭へ出すのをいやがつたが、葉だけはよくきざんでくれた。そして時々、「一寸、一寸だけ切つちやつたけど、ぢき直る。」といひ乍ら指を押へてメンソレータムの壘を取りにきた。亡くなつた時もまだ左の人差指の傷痕が癒え切らぬま々であつた。

病氣に罹る前日の午後は新田の大嶋さんのお宅でおま々ごとをし、帰つてから夕方私が風呂を焚いたり薪を割つたりしてゐる間家の兄弟四人と隣の姉弟三人とで遊んでゐた。兄が砂鉄を集めてゐたので其れを見てゐるものとはかり思つてゐたが何時の間にか操ちゃんが往来から土を運んで来て、小さい三人は家の横の杉垣の下でお団子を作つてゐたさうだ。三十分ほどたつて、「私もう止めた」といつてまさ子はクリーム色の縮の洋服をはたきはたきお風呂場へ来て手を洗つた。大好きな赤い水玉模様のエプロンをぬらさぬ様に注意しながら。

そして其の翌朝、先づ操さんが発病し続いてまさ子、敏彦の順で高熱を出した。

鶴り生残つた一番小さい敏彦が快方に向つた時尋ねると姉ちゃんとしらへたお団子はお盆へのせておまゝごとをしたよといふ。兄達は其れは操ちゃんの家のアルミニウムのお盆に違ひないと説明した。

今も眼を閉ぢれば「ハイ、お待ち遠様、敏ちゃんお団子をこわしちや駄目よ」といふきび々々したまさ子の声が聞えるやうに思はれる。去年の七月買ひ与へる約束のバスケットにはいつた西洋料理のお道具は父親が三越から求めて床の間の写真の前になる供へた。

妹まさ子

矢 島 文 夫

まさ子はままごとをずいぶんしました。夏等は庭へごぎを敷いて家にしました。さうしてそこへままごと道具を置き自分のお人形を三つ四つ並べて仕たくをしました。時々庭へ出て行つて朝がはやダリアを取つて来る時もあるれば又そこいらのざつ草も取つて来ました。まさ子はままごと道具の外にお母さんからいただいたびんをもつて居ますのでそれへ朝がほをしぼつて入れたりしました。そういふやうな水はびんから少しづつままごとの茶のみ茶わんへわけて御飯の時出します。僕の家のみは杉のいけ垣ですから御飯のかはりに杉のみをたくさん取つてそれを使ひます。ままごとがつまらなくなるとみかん箱へきちん

ともどして後しまつをしました。

昭和九年の秋保田へ行きました。その時お父さんとまさ子と敬二と僕でこのぎり山といふ山へ行きました。さうしてトンネルをたくさんぐりまた海岸へ出たりして向ふがはに出来ました。家へかへつてもまさ子は「まだくたびれない。」といひました。まさ子はあんなに歩いたのは始めてです。それから足が一そう丈夫になつて市川の家へかへつてからいつだかわすれましたが曾谷の方へくりひろひに行つた事もあります。曾谷は市川真間からは大分はなれて居ます。

昭和十一年の冬築地小劇場で昆虫記といふ芝居を見ました。これは虫だけの劇です。その時かまきりがこほろぎ等を食べる所を見るとまさ子は目をつぶつてしまひました。てふ々々が出て来るときれいなのでまさ子は目を見張りました。それから後に僕たちは芝居のまねをして遊んだ時まさ子はさつそくてふて

ふになりました。てぬぐひやエプロンで羽を作つて背中に付け、頭にはひげのやうな物をボール紙を切つて作りそれをかぶるやうにしました。さうしてみんな出来るとそれを身に付けて座敷でをどつたりしました。僕たちはその時くもやくそ虫になりました。

まさ子はお人形を三つ四つ持つて居ました。その中には名前のついて居るのもありました。おままごとの時などは人形をお客にしてあそぶのです。まさ子と人形は仲の良い友だちでした。ですからお父さんが人形のしんだいといすを作つて上たらまさ子はとてもよろこびました。さうして人形をかはるがはる乗せて遊びました。

マコチヤン

ヤジマケイジ

昭和十一年ノ四月十七日ハママ川ノフチデツクシヲトリマシタ。

カヘリニウマガ来マシタ。

ソレカラ犬ガ来マシタ。

マコチヤンハ「コハイ。」トイヒマシタ。

ニイサンハ「コンナノコハカナイヨ。」トイツテ犬ノソバヘイツテミマスト犬ガ「ワンワン」トホエタノデニイサンハチヂコマリマシタ。

マコチヤンハタイソウトランプガスキデシタ。

ソシテイツモ土エウ日ダケシテヱマシタ。

ソシテジブンガカット「コレナンノフダ」トトウサンニキキマシタ。

トウサンニザツシノフルイノヲモラツテ、シカクニキツテ、ハコニシマツテ
オキマシタ。

ソレカラマイバンアイウエオヲナラツテイマシタ。アナラアサガホイナライ
ストイフヤウニシテヱマシタ。

あとがき

私はこの二三年のうちに身近に人の死をいくたびか経験しました。昭和十年一月九日に祖母が亡くなりました。同じ年の十二月二十一日には寺田寅彦先生がお亡くなりになりました。昭和十一年十月二十一日に祖父が亡くなりました。さうして昭和十二年六月十五日に長女まさ子が亡くなりました。祖母は八十二、祖父は八十七でありましたから、此の二人は寧ろ天寿を完うしたといふべきですが、寺田先生のお亡くなりになったことは返すがへすも残念なことでした。私ははからずも先生の遺稿の整理の一部を手伝ふことになり、その仕事のさなかに長女を失ひました。其の仕事も今年の春を以て終りを告げ、先生のみたま

の前にこれを捧げ、さて自分の身边を振り返つてみると感慨の新たなものがありました。

人間は死ぬといふことは誰でもよく知つてゐるけれども、それが自分の身边に起らうとは誰も余り予期してゐることではありません。殊に子供が死ぬといふことは堪へ難いことです。私はその堪へ難い気持の中に間もなく一周年忌を迎へようとしてゐます。私は死んだ子供のことを思ひ、折角此の世に生を享けながら自ら何ものをも此の世に寄与することが出来なかつたわが子のために其の短い生涯の記録を書いて置いてやりたいと思ひました。それは秘録として家に遣せばよいのですが、同時に私はそれを親戚知友に分ちたい心持もあります。また一つには、私のほかの子供たちのために一人の姉妹のあつたことを書き留めておいてやりたいとも思ひます。そこで今、一周年忌を迎へるに當つて此のささやかな追悼録を作ることになりました。

此の追悼録に何か花の名をつけてやらうと思ひ考へてみましたが、死んだ子供はまだ小さかつたから何の花が特に好きといよほどのことは分りません。仮りに題して「すみれぐさ」としました。時年不幸の折、宇田道隆君から「果敢やな蹄にかかる董草」といふ句をいただきました。また芭蕉依つて「山路来て何やらゆかし董草」とよまれた董は可憐ではあるが、その調子の高い色彩には何か悲しい一面があるやうな気がします。

私が悲しみに沈んでるとき私の叔父は心を天地の悠久に此べよと言つて呉れました。当時私はさういふ抽象的な言葉は何の慰さめにもならないと心ひそかに思ひました。然し次第に時が経つにつれてよく考へてみるとそれは矢張り貴い言葉であると思ふやうになりました。われわれの喜びも悲しみも悠久な天地に比べれば物の数でもありません。今から何十年何百年といふ時が経てばわれわれは一樣に一つの点のやうなものに投影されるか或ひは見えなくなつてし

まひます。そのときに残るのは人の仕事だけであります。われわれは悲しみを忘れて生命のつづく限りは働かなければならないと思ひます。さうして全力を尽してやがて自分も亦その生を終るとき、若しもまさ子が天國に居るのなら天國の人口で私を迎へて呉れるであらうと思ひます。勿論それには私も天國へ行かれるやうに心懸けなければなりません。

今私は幸薄かつたわが子のために此の墓標を建てるに当り此の一年間のことを回想して今回の支那事変のために父を先ひ兄を矢つた幼い人たちの多くあることを思はないわけにはゆきません。その幼い人たちの上に幸の豊かならんことを祈る心しきりであります。私の子供の死んだのはまだ蘆溝橋の銃声も起らない時でありました。

数ならぬわが子のために兎も角も此のやうな追悼録と作ることを得ましたのは皆様の御同情のお蔭であります。ここに皆様にお礼を申し上げます。昨年不幸ののち、家をかへて気分を転換してはとすすめて下さつた方々もありました。然し、さうたやすく気分が換へられるとも思はなかつたし、又不幸があつたからと言つて逃げ出すやうに居を変へるのも嫌でありました。まさ子も丈夫で一緒に暮してゐた家にもつと居たいといふ感傷もありました。けれども市川の今までの家も四囲の状況が余り面白くなつて来たので今度勧める人々に従つて私は最近家をかへました。まさ子の知らない家で一周年忌を迎へることになつたわけであります。もつと早く家でも変へてゐたらあんな病氣にならなかつたのではないか等とも思ひますが、それはどうも致し方のないことでありませう。まだともすれば此のやうな弱い気持が出て来るのでありますが、どうかこれからも皆様の御鞭撻を希ふ次第であります。

昭和十三年五月三十一日

船橋市小栗原にて 矢島 祐利 記

昭和十三年 六月 十日 印刷

昭和十三年 六月 十五日 発行 (非売品)

編集並發行人

船橋市小栗原五十一番地

矢島祐利

印刷人

東京市神田区美土代町十六番地

島連太郎

印刷所

東京市神田区美土代町十六番地

三秀社